

⑨⑨ 視座 考古学から眺めた現代社会

関 雄二 先端人類科学研究部

アンデス文明の形成過程を追うため、長年ペルーで考古学調査に携わってきた。なかでも、「形成期」という、まさに文明の母体が形成された時代を対象に研究を進めてきた。年代でいえば、紀元前 2500 年頃から西暦紀元前後までを指す。西暦紀元後には、初めての国家が成立するので、形成期というのは、前国家段階の社会であり、国家のような複合社会が成立する以前の社会統合のありかたを検討するうえで、格好の研究対象といえる。

この形成期研究で、私が近年注目しているのが権力論である。考古学は古の社会を研究する浮世離れした学問だと思われがちだが、最近では、ポストコロニアル研究の影響を受け、研究者が選ぶテーマに、同時代の状況を読みとるというメタ研究も盛んになってきている。権力論の流行も、そのひとつとして説明できる。東西冷戦が終了し、多極化が進む現代では、昔ながらの覇権主義が認められるとはいえず、国家の枠を超え、地球大規模の影響を持つ情報産業が生まれるなど、いったい、誰がどのように権力を行使しているのかが不透明になりつつある。多様かつ複数の権力の並存と相互関係に関心が向けられ、学問がその影響を受ける状況が目の前にあるわけだ。こうして私自身の研究は、権力論を媒介に過去と現代社会を行き来しつつある。

権力論で、私がとくに注目するのが、経済、軍事、イデオロギーを権力の資源ととらえ、リーダーが、これらの資源をどのように組み合わせて、権力を掌握していくかという視点である。考古学的データをもとに、大きな見通しをいえば、経済面を重視することは比較的安定的な権力が生まれやすいこと、しかし、それ以上に強調したいのは、3種の要素が、密接なつながりをもたないと、安定的かつ大規模な社会が生まれないことである。

アンデスの形成期社会の場合、前国家段階とはいえ、巨

大な祭祀建造物が建設され、幾度も増築や更新がなされたことが、私たちの調査で明らかになっている。重要なのは、この増築や更新が、労働統御の強化や余剰生産物の増産を刺激し、灌漑などの新しい技術を生みだし、やがて階層社会の成立へとつながっていった点であろう。「形成期」は、神殿建設に代表されるように、基本的にはイデオロギーへの投資を重視した時代ではあったが、経済とのつながりもリーダーの権力基盤において重要であった。

じつは形成期と似たようなことを身近に目撃したことがあるので紹介しよう。ある日本の新宗教系団体の活動である。年に1度、世界中から信者が集まる大祭が催されるのだが、このとき神域へと導くアスファルトの道路が掘り返され、参加者用の機敷が設置される。ところが祭礼の終了とともに、再び舗装しなおされるのである。一見、無駄にもみえるこの作業で、舗装を請け負うのは、件の宗教法人関係の会社であり、結果として信者に経済的恩恵がもたらされることになる。これが毎年くり返され、信者の紐帯が強化されていく。

こうした視点を現代政治に照射してみてもおもしろい。経済面を追求するだけでは、大規模な社会を牽引するような権力は生まれにくいというモデルは、軍事と民主主義というイデオロギーを組み合わせしてきた米国の姿をみれば有効であることに気づく。ひるがえって、我が国では、軍事はともかく、経済面と文化面を分離させ、文化面を切り捨てる政策が横行している。これが権力、ひいては経済を含む社会全体を脆弱化させることは、火を見るより明らかである。強固な権力者の下での階層社会を目指せというつもりはないが、もう少し賢い権力資源の利用を考えないと、この国の行く末は暗い。